

中国大陸の東部地区、中部地区、西部地区の変容能力と発展水準の違いを説明するために、われわれは「社会変容勢」の概念を提示した。変容勢によって中国大陸を三つの類型あるいは三つの水準に分けた。東部地区は変容の強勢地区であり、中部地区は変容の中勢地区であり、西部地区は変容の弱勢地区である。当然、変容強勢の地区は、確かに強勢要素が優位にあるが、すべてが強いわけではない。程度の違いで弱勢要素と中勢要素が存在している。同じように、変容弱勢の地区は、すべてが弱いわけではない。程度の違いで強勢要素と中勢要素が存在している。したがって、変容中勢の地区は自分の強勢要素と弱勢要素が存在している。中国社会の変容あるいは現代化の過程は、各地区の勢を絶えず改善し、強勢要素を高めてゆく、たえず弱勢要素と中勢要素を縮小させ、なくしてゆく過程である。

社会学の一つの特徴としては、数量化ができる対象をできるだけ数量化する。われわれが社会変容度と社会変容勢を提示した意図は、社会変容を数量化できる部分を社会指標によって提示することにある。

四、

中国社会の大きな変化については「乱を治め、衰を興す」という社会運営の角度から概括することができる。1966年から1976年までに発生したいわゆる「文化大革命」はすべての中国人と中国学者に深く心にとどめる教訓を残した。その時期に、各年齢層の中国人はさまざまな形の傷害を受

けた。これは最近の中国が経験した名実相伴う「十年大乱」である。同時に、中国社会思想に深い研究を蓄積してきた嚴復もスポンサーの『社会学研究』を翻訳したとき、社会学は社会の治、乱、興、衰の原因及び治に至る方法とルール科学であると定義した¹¹⁾。今日のわれわれに大きな啓発を与えている。われわれは治乱興衰の社会運営の概念を用いて、社会運営を良性運営と協調発展、中性運営と模糊発展、悪性運営と奇形発展という三類型に分けて考察する。さらに「社会学は社会運営と発展の条件とメカニズムに関する、特に社会良性運営と協調発展の条件とメカニズムに関する総合性ある具体的科学である」という新しい内容を与えた。事実上、嚴復の思想を継承しながら、新しい内容を作り出した。この中国特色あって、世界社会学の伝統と潮流から離れていない観点を社会運営論と称している。ここで、伝統とは、コントから現在までの大多数の社会学定義が「秩序と進歩」、「構造と過程」、「運営と発展」から離れていないことである。潮流とは、世界社会学の総合性傾向を指している。現在、私の観点は中国国内の数多くの教科書に採用されているが、一つの主流論点として支持されている。実際の社会問題分析に使われている。「運営メカニズム」、「協調発展」、「良性運営」などの用語が一般大衆ことばになりつつある。社会運営論に関する四冊の代表作は注で説明している。¹²⁾

われわれは以上の視点をを用いて、新中国が建立して以来、1978年までの社会運営状況を分析した。次の表で示す。

以上に述べた中国成立して以来の運営状況は過

新中国が成立して以来、1978年までの社会運営状況

時期	1949 1956	1956 1959	1959 1962	1962 1966	1966 1976	1976 1978	1978 現在
運営状況							
良性運営	初步的良性						良性増加
中性運営		中性運営↓		中性運営↓		中性へ移行	中性運営↑
悪性運営			局部悪性		全面悪性	悪性脱却↑	

11) 原注⑨：嚴復『群学肄言』のまえがき

12) 原注⑩：『社会学対象問題新探』1987.7 『社会学概論新編』1987.11 『社会指標理論研究』1989.9 『社会運行導論—有中国特色的社会学基本理論的一種探索』1993.4 以上四冊は中国人民大学出版社より出版されたものである。